

日	1	友引	定休日
月	2	先負	
火	3	仏滅	
水	4	大安	
木	5	赤口・啓蟄	
金	6	先勝	
土	7	友引	初午宵宮
日	8	先負	初午大祭 休日営業
月	9	仏滅	
火	10	大安	
水	11	赤口	
木	12	先勝	プチ茶会
金	13	友引	プチ茶会
土	14	先負	プチ茶会
日	15	仏滅	定休日
月	16	大安	
火	17	赤口	
水	18	先勝	
木	19	友引	
金	20	先負・春分の日	定休日
土	21	仏滅	
日	22	大安	休日営業
月	23	赤口	
火	24	先負	
水	25	仏滅	
木	26	大安	
金	27	赤口	
土	28	先勝	
日	29	友引	定休日
月	30	先負	
火	31	仏滅	

「南方録」をひもとく
「七代宗哲 利休好松ノ木盒」
を使用させていただきます

ちょっとリッチなプチ茶会

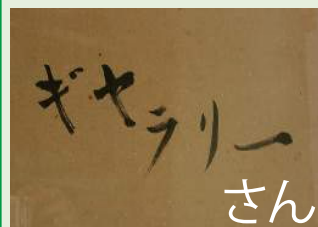


同時開催 唐津焼12代武村利左エ門新作展&お買い得市

3月
12 木
13 金
14 土

全国和菓子めぐり 一日四十個限定
加賀百万石 古都金沢のお菓子で
プチリッチなお茶会を

月刊
いつもの



(題字・三輪休和)

123号

2020年3月発行

9:00 am → 4:00 pm
於 1階小間席

東京 静嘉堂文庫美術館の「秘色 ひそく」と国宝「曜変天目(稲葉天目)」 重文「油滴天目」の仕覆

静嘉堂は、岩崎彌之助(1851~1908 彌太郎の弟、三菱第二代社長)と岩崎小彌太(1879~1945三菱第四代社長)の父子二代によって設立され、国宝7点、重要文化財84点を含む、およそ20万冊の古典籍(漢籍12万冊・和書8万冊)と6,500点の東洋古美術品を収蔵している。静嘉堂の名称は中国の古典『詩経』の大雅、既醉編の「へん豆静嘉(へんとうせいしか)の句から採った彌之助の堂号で、祖先の霊前への供物が美しく整うとの意味。明治期の西欧文化偏重の世相の中で、軽視されがちであった東洋固有の文化財を愛惜し、その散亡を怖れた岩崎彌之助により明治20年(1887)頃から本格的に収集が開始され、さらに小彌太によって拡充されました。彌之助の収集が絵画、彫刻、書跡、漆芸茶道具、刀剣など広い分野にわたるのに対して、小彌太は、特に中国陶磁を系統的に集めている点が特色となっている。今回開催の「磁州窯と宋のやきもの 2020年1月18日~3月15日」では、館蔵の中国宋代(960~1279)の陶磁器「宋磁そうじ」磁州窯とその周辺を紹介し、世界に3点しか現存していない国宝「曜変天目(稲葉天目)」を展示しています。特に平日は曜変天目をゆっくり鑑賞できます(。^。) ※展示期間詳細は直接美術館までお問い合わせください。



静嘉堂文庫(1924年築)

「秘色」は、中国唐代末9世紀の南方・呉・越の地方で焼かれた瓷器しきという焼物で、日本に渡来して「ひそく」と呼ばれた。越州窯青磁えっしゅうようで、その発色には幅があり、淡い青緑色のものから黄緑色のものまで見られる。また青磁の別名「秘色」の由来は、晩唐の陸龜蒙(りつきも)が『秘色越器詩』の中で「九秋風露越窯開、奪得千峰翠色来」と詠んだ越州窯青磁に由来する。『源氏物語』の六帖・第七段、末すえ摘つむ花はなの一節に、「御台、秘色やうの唐土のものなれど、人わるきに、何のくさはひもなく、あはれげなる、まかでて人々食ふ。」雪の激しく降る日に、屋敷を訪れた光源氏が、こっそりと覗いた末摘花(常陸親王の娘)の邸宅の情景です。

青磁刻花牡丹唐草文盒



越窯 秘色

また11世紀高麗では中国越州窯青磁の作風の影響を受け、独自の翡色青磁(高麗青磁)をつくり上げた。尚、翡色青磁の語源には諸説がある。

国宝 大名物 曜変天目(稲葉天目)の仕覆

曜変天目は、中国南宋時代、福建省・建窯で焼成された極めて希少な黒釉茶碗(天目)。見込みに現れた大小の斑文の周囲に、瑠璃色から虹色の光彩が輝いているのが特徴。伝来は、徳川三代将軍家光→春日局(嫁ぎ先は稲葉家)→稲葉美濃守正則→稲葉家→小野家(稲葉家親戚)→昭和9年岩崎小彌太所蔵→静嘉堂に移管。家光が、病気の春日局にこの茶碗で薬を入れて出すが、病弱の家光を守るために薬絶ちをしていた春日局は結局胸に流して飲まなかった。後にこの茶碗はそのまま春日局に留まり、稲葉家に伝わった。また小彌太は生前「名器は私に用うべからず」として一度も使わなかった。①曜変天目が岩崎家に入った折、新潮された仕覆である。霊芝形の雲文を一葉の形にまとめ、それを互の目(交互斜め)に配した意匠の金襴。薄茶地ともみえる白地に金糸の輝く、格調高い白地金襴です。明時代15~16世紀の仕覆 ②紺地の地に、金の平金糸(箔糸)を用いて牡丹唐草が織り出された明時代初期の華麗な「金地金襴」長い伝世のなかで、金糸の箔の大部分が剥落してしまっているが、もとは「入子菱」の地紋までが金色に輝いていた。蔓の部分が二重に表される「二重蔓牡丹金襴」は、室町将軍家に伝来した。唐絵の表装でも重用されてきた名物裂で、明時代14~15世紀の仕覆



重文 油滴天目の仕覆

③朝顔形に口部を広げる大ぶりの建蓋。内外で銀から虹色に輝き密集する油滴班も格別の大きさを誇る、大阪・藤田家にあり昭和4年岩崎家の所蔵となる。華やかな各色の絹糸と金・銀の撚(より)糸で、如意頭文など幾何学文を大きく織り出した清朝の錦。裂の文様が側面で合わされ、美しく継がれている。紐の紫色も映り良く、美しい誂えの仕覆である。明時代17~18世紀の仕覆

- 秘色 越州窯青磁
- 曜変・油滴天目 建窯
- 高麗青磁



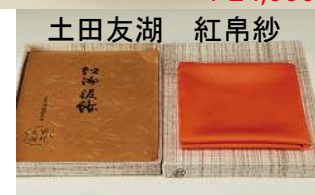
定一 油滴天目 覆輪手書

¥24,000



玄々斎好白釉地金襴

¥8,120



土田友湖 紅帛紗

3枚限り ¥16,000



坐忘斎好 松蔓紹巴珊瑚 古帛紗

¥58,000

華乃会プチリッチな
お買い物のご紹介です

..編集の窓..



薺 photo by S.A

「ペンペン草」...風に揺れたときの音から「三味線草」...実が三味線のバチに似ているのでよく見れば なつな花咲く 垣根かな 松尾芭蕉

薺 なつな



ギャラリー森田ホームページ
左記のQRコードを読み込み
アクセスしてください!
スマホでご覧いただけます

ご案内



Instagram